

第19回夏期特別集会(3)(伊豆松崎)

七度の七十倍

——マタイ伝18章21～35節——

1972年8月26日

小池辰雄

天国の及第者 限りなく赦せ いいよ、かまわないよ 無条件の赦し 「ペター・ザン・ザン・ベスト」 十字架の門 赦しと恵み 恵みの中に

【マタイ18】

21ここにペテロ御許に來りて言う『主よ、わが兄弟われに対して罪を犯さば幾たび赦すべきか、七度までか』22イエス言いたもう『否われ「七度まで」とは言わず「七度を七十倍するまで」と言うなり。23この故に天国はその家來どもと計算をなさんとする王のごとし。24計算を始めしとき一万タラントの負債ある家來つれ來られしが、25償い方なかりしかば、その主人、この者と、その妻子と凡ての所有とを売りて償うことを命じたるに、26その家來ひれ伏し、拜して言う「寛くし給え、さらば悉く償わん」27その家來の主人、あわれみて之を解き、その負債を免したり。28然るにその家來いでて、己より百デナリを負いたる一人の同僚にあり、之をとらえ、喉を締めて言う「負債を償え」29その同僚ひれ伏し、願いて「寛くし給え、さらば償わん」と言えど、30肯わずして往き、その負債を償うまで之を獄に入れたり。31同僚ども有りし事を見て甚く悲しみ、往きて有りし凡ての事をその主人に告ぐ。32ここに主人かれを呼び出して言う「悪しき家來よ、なんじ願いしによりて、かの負債をことごとく免せり。33わが汝を憫みしごとく汝もまた同僚を憫むべきにあらずや」34斯くその主人、怒りて、負債をことごとく償うまで彼を獄卒に付せり。35もし汝等おのおの心より兄弟を赦さずば、我が天の父もまたなんじらに斯のごとく為し給うべし』

●天国の及第者

さきほどの感話会では本当に私たちは、はらわたから語り、はらわたにおいてこれを受けとって、承りました。しかし、ときどき、ズレているのがあると、私のはらわたが煮えくりかえる。この福音を受けていて、何をそんなズレていることを言っているか、と言いたくなるわけです。ときには大喝したくなるけれども、その大喝ということと、それから、



大きな深い憐れみということがやはり一つになっている。聖書の中に「神の怒いかり」というのがある。マルチン・ルターが、

「神の怒は愛の別な表れ方だ」と言いました。

福音の世界は実に千変万化です。大自然のようなものです。教義とか、何とかかんとかと整えたような、そんなものではない。なぜ、教会がダメかというのと、教会の悪口を言うわけではないけれども、枠の中に入っているんですよ。キリストは「教会」なんか作りはしない。

「汝ら、小さき群よ」

と言われた。キリストの現実、使徒たちの現実、神の国は迫っている。20世紀も、15世紀もいつもそうです。いつもそうなので、終末を現前にしての、のつぴきならない現実です。呑気な制度なんかやっている時ではない。内村先生が無教会というのを始めたのは、そういうところにある。また、無教会が主義に変わって、

「主義、主義」

なんて言うから、

「主義はダメだ」

と私は言うんです。その意味においては、相対的に教会がどうの無教会がどうのと、そんなことを私は言っているのではない。どんな枠の中にいたって、枠にいながら枠を乗り越えていけば、それはそれで結構です。人間のすることはどうせみんな五十歩百歩なんです。から。大事なことは、その中に本ものがあるかどうか、それだけです。

T大生の話が出たが、私はT大生は嫌いだ。頭でつかちでね。私は十何年かT大で教えて、ドイツ語の時間にさんざん脱線して福音の話をして、彼らはあるところまでは興味を持つけれども、その先はやってこないんだ、小利口だから。全身で飛び込んでくることをしない。それよりか、D大の生徒の方がよっぽど人間らしい。D大の生徒は天国の及第者、T大生は天国の落第者だ。そういうことになっているんですよ。この世で牛耳っているようなやつらは大したことはない。ところが、この世でどん底を担っているのが本当の天国人なんです。

それはパウロがコリント前書1章でちゃんと書いてくれている。弱き者、乏しき者、無きが如き者に——パウロの28節で言う

「無きが如き者」

は、

「無き者」

という言葉ですが——そこに神さまは期待しておられる。我々はいわゆる落第生的な者は——私もそうなんです——これが実は天国の本当の及第者にさせていたただくわけです。



それだけの自信を持ってよろしい。どうぞ、そういった天来の希望を満々として進んでください。絶対に負けない。本当にそうです。

さつき、F君が

「キリストの十字架が溶け込んでいる、錆びついている」

と言った。私はこの言葉に参った。本当に私たちはそうになりたい。我々の気合いは、打てば響く正に観音の世界を行っている。

今日はもう、時間制限なしにやるかもしれない。時間なんか考えていたらダメだから。もうこれは最後の晩だ。あしたはまた絶頂にきますけれども。真理の世界、キリストの真理が切り込んできたなら、眠気なんか醒めてしまふ。眠ってなんかいたら、大喝してやる。

私だって、散々、午後は泳いだ。とても愉快だった。大海はいい。私は昨日の晩、水を見たら、飛び込みたくなつた。水瓶座の下に生まれたからそうかもしれない(笑)。大体、龍なんていうのは水と縁がある。

「雨呼ぶ龍か、雲呼ぶ虎か」

なんて言うけれども。まあ、それは半分冗談ですが。

大海に身を没する。私の非常に好きな詩に、

「キリストの愛の大海に身を躍らせる」

というドイツ語の詩がある。O先生がなかなか飛び込みができなかった。しかし、一端踏み込んだら、初めての飛び込みは実に見事な飛び込みで、私は喝采したわけだ。やはり、あの飛び込みの気合いなんです。それで、先生はすっかり喜んでしまつて、また二回、三回と飛び込んだ(笑)。

その飛び込みのあの気合い、これが福音の世界なんです。キリストの中に突入する。全身を投身する。すると、大海は抱くんです。何をしたって、全部、キリストの中なんですよ。ですから、学ぼうが遊ぼうが何をしようが、全部、それを本当の霊的という。

私はなぜ、こんなに自由かという、68歳であれだけのエネルギーが出てくるのは、ただ若いときから泳いでいたからではない。やはり、この御霊みたまの力が一切のことに働いてくださるんです。フツと受けとると、そうするともうストロークが軽くなる。そして、グングン進む。ランニングでもそうです。まあ、あまり無茶したらいけませんけれどもね。

御霊のキリストの生命にきたら、もう行き詰まりを知らん。無制限の世界です。もちろん、私たちには量的には制限がありますが、質的には無限無量なるものを、無限無量を質的に捕まえてくださいよ。

● 限りなく救せ

それでは、マタイ伝18章に入ります。何も解釈するわけではない。ペテロはすぐこうやつて真先にものを言うわけですが。



「兄弟が罪を犯せば」

とかいうことが、18章の15節あたりから出ている。罪の問題が来たものだから、

21ここにペテロ御許みもとにきた来りて言う『主よ、わが兄弟われに対して罪を犯さ

ば幾たび赦すべきか、七度ななたびまでか』

もちろん、この原文では、

「幾度罪を犯したら、それを赦すべきか」

という言い方です。何回罪を犯したらば、私たちは何回まで赦したらいいかと。これはユダヤのその時の習慣法では、三度までなんです。三回までで、四回からは赦すなど書いてある。だから、ペテロは、

「七度まで」

と言って大いにいい気になって、大いに赦すとすれば、キリストに誉められるかと思つたところが、どっこい。

22イエス言いたもう『否われ「七度まで」とは言わず「七度を七十倍するまで」

と言うなり。

「七度を七十倍する」という表現は実は、旧約の始めの方にある。創世記4章。これは赦すのではなくて、罰する方の悪い例ですけれども。カインのところですよ。カインというのとはとにかくアベルを殺した。その血筋ですから、どうも血生臭い血筋なんだ。エノク、レメクというのが出てくる。レメクにアダとチラという二人の妻がある。23節、

「23レメクその妻たちに言いは、アダとチラよわが声を聴け、レメクの妻

らよわが言を容いれよ、我わが創傷いたでのために人を殺す、わが瘻きずのために少年わじうとを殺す。

24カインのために七倍の罰あれば、レメクのためには七十七倍の罰あらん」(創

世記4・23～24)

と。これは復讐の、「剣の歌」という物騒な歌なんです。これは赦しの歌ではない。復讐で、そういう七十七倍の罰を被らせるぞ、おつかないぞと。ここに、

「七十七倍」

という言い方があるので、「七の七十倍」ではなくて——キリストのこの言葉もギリシア語としては「七十七倍」という読み方もできる。ここには訳文のとおり、「七度の七十倍」としましたが——今の学説としてはむしろ「七十七倍」というこの創世記の方から来たという、そこをキリストは逆用されたんです、

『七十七倍まで』と言うなり

と。

「七」という数は、ペテロが「七」と言ったときには、「七」は完全数なので、それで赦しも「全き」という気持で、「七」と言った。「七」というのは非常に出てきます。黙示録にはさんざん出てくる。「七つの鉢」とか、「七つの燈台」とか、「七つの角」とか、「七つの目」とか、



いろいろ出てきたでしょ。それから、一週間も七日だし。レビ記の26章あたりにさんざん出てくる。

「¹⁸汝ら若しかくのごとくなるもなお我に聴きしたがわずば、我汝らの罪を罰する事を七倍重くすべし」(レビ26・18)

とある。こここのところも罰する方です、赦すのではなくて。

箴言におもしろいところがあった。あなた方、

「七転び八起き」

というのは東洋の言葉だと思ったら、箴言にちゃんと出ている。箴言24章16節に、

「そは義者^{ただしきもの}は七次^{たび}たおるるともまた起く。されど悪者^{あしきもの}は禍災^{わざわい}によりて亡ぶ」
(箴言24・16)

と書いてある。七転び八起きでしょうが。ダルマのごとく。箴言24章16節に、七転八起のことが書いてある。箴言というのとはなかなかおもしろいですよ、読んでみると。

こつちだつて、「お七夜」とか、「七本槍」とか、「七福神」とか、いろいろあるわけだ。「七」なんていうことを言いだしたら、きりがなからやめますけれども。女の方の月経のことだつてそうです。七の四倍、28日が一か月になつて勘定されるわけです。みんな七に関係している。

そんなことで、「七」ということを「完全」の気持で言ったが、そんなものはまだ本当の完全ではない。キリストは、

「七度を七十倍まで赦せ」

と——「七十七倍」でもどつちでもいいですが——ということは、要するに、数えているのではない。

「限りなく赦せ」

ということですよ。

●いいよ、かまわないよ

²³この故に天国はその家来どもと計算をなさんとする王のごとし。²⁴計算を始めしとき一万余ラントの負債ある家来つれ来られしが、²⁵償い方なかりしかば、その主人、この者と、その妻子と凡ての所有とを売りて償うことを命じたるに、²⁶その家来ひれ伏し、拜して言う「寛くし給え、

「寛くし給え」というのは、「ご猶子を願います」ということ。しばらくご猶子をと。

さらば悉とく償わん」²⁷その家来の主人、あわれみて之を解き、その負債を免したり。

これは無条件に免してしまつた。「ご猶子」どころではない。もう即刻無条件に免してしまつた。



「償い方なし」

という。我々の罪もまた償い方なしだ。罪の償いということもあります、ある相対的な意味では。悪いことをしたから、善いことでそれを少し償おうなんて。相対的な意味ではそういうこともありますけれども、それは救いの世界には関係ない。救いの世界では、私たちに全くキリストの恵みによるよりか仕方がない。私たちは償い方なき存在である。だから、キリストはこの譬話で——「寛くしたまえ」どころではない——即刻赦してしまった。無罪放免です、負債を免じたりするんだから。無条件に赦してしまった。イエスの世界はすべて全的な世界です。部分的な世界ではないですから、すべて全的にくる。無条件に赦した。

28 然るに其の家来いでて、己より百デナリを負いたる一人の同僚にあい、片一方は「一万タラント」、片一方は「百デナリ」。全然、ケタが違うわけです。

之をとらえ、喉を締めて言う「負債を償え」29 その同僚ひれ伏し、願いて「寛くし給え、さらば償わん」と言えど、30 肯わずして往き、その負債を償うまで之を獄に入れたり。31 同僚ども有りし事を見て甚く悲しみ、往きて有りし凡ての事をその主人に告ぐ。32 ここに主人かれを呼び出して言う「悪しき家来よ、なんじ願いしによりて、かの負債をことごとく免せり。33 わが汝を憫みしごとく汝もまた同僚を憫むべきにあらずや」34 斯くその主人、怒りて、負債をことごとく償うまで彼を獄卒に付せり。35 もし汝等おのおの心より兄弟を赦さずば、我が天の父もまたなんじらに斯のごとく為し給うべし』

この物語は我々の日常生活の中に大なり小なり、いろいろな形で出ている。私たちはキリストに無条件に赦されながら、人をいかに免すことのお足らざるかということ。「赦す」という言葉が——それはキリストの場合はいいですよ——けれども、私たちは人に対して「赦す」なんていう、何かこつちが高飛車に出たように、

「ああ、ゆるしてやるよ」
なんてね、そういうようなことでもいいんだらうかと私は思う。

私はこの「赦す」という言葉があまり響かない。キリストは無条件に私たちを赦してくださった。これはもう平伏していただきますけれども。

「人に赦される」とか、「人を赦す」とかいう、人間同士でもって「赦す」という言葉がどうも私にはピンとこない。私はむしろ日本語としては、「いいよ」という言葉が一番いいのではないかと思う。

「ああ、いいよ、かまわないよ」

と。「いいよ」とか、「かまわないよ」という、そういう気持が本当の——もし「赦す」ということなら——「赦す」という気持だと思う。「赦してやる」というような、そういう「赦し」は、私は本当の赦しだと思わない。自分が高飛車に出て、こつちは自己を義認してい



るわけだ。自分を義ただしいとし、相手を間違っているとして、赦してやれと。そういうことが、私たちがこの罪びとがそんな気持ちで言えていいものか。それが本当の「赦し」かと。

その「いいよ」とか「かまわないよ」という言葉の奥には憐れみ、愛がある。むしろ「赦し」という言葉はもつと積極的な内容を持った、

「本当に相手を逆に活かし、相手を逆に明るくしてやるようなことなのではないか」と、聖書のこの譬話を、私たち人間として受けとるべき角度なのではないかと思う。

それは、イエス・キリストに赦されたこの赦しによって、キリストの赦しをもって相手を「いいよ」と言うのであって、私たちが人を赦す権利も、また赦す資格もない。本当に人を赦すことのできるのはキリストだけです。イエス・キリストだけが即ち、罪無き者だけが罪を赦すのであって、罪ある者が罪ある者を赦すもへつたくれもないんだ、本当は。そういう意味において、

「いいよ、かまわないよ」

と言って相手を立ち上がらせていく。それがクリスチャンの本当の気持ではありませんか。

●無条件の赦し

キリストの無条件の赦しということ。プロテスタントにおいても、また、パウロの書簡を読んでも、私たちのいわゆる無教会時代も、罪の赦しということが非常に教えられてきた。マルチン・ルターも、その「赦し」ということを非常に言っているわけです。この「赦し」という言葉に今度は、我々が躓いてはいかん。もうひとつ奥の角度から、赦しは本当は相手を愛していく。相手を赦すことにおいて、逆に、自分がそれによってなお強く深くキリストに赦されていくわけです。イエス・キリストの赦しを受けとっていくことは、逆にプラスに人を救っていくことになる。そういう意味において、我々は、いわゆる「審く」なんていうこととおよそ違った角度です。

この譬話を見ましても、キリストの無条件の赦しに、無限無量のキリストの赦しに与あずかっただけ私たちは、どんなことがあっても、相手を本当に黙って赦す。相手が悔い改めてきてから赦すというのは普通です。しかしながら、たとえ悔い改めなくても、もうひとつ奥から本当に赦しをもって、赦しの祈りをしていく。

「迫害する者のために祈れ」

ということとは、この角度がなかったら、迫害する者のために祈ることができない。これはやっぱり、何といても、キリストの愛です。赦しと、それから救いの愛。これが来ているときには、私たちは本当にどのような事態におきましても、相手をぐつと大きく包んでしまう。

この「赦し」という言葉が反かえって躓つまずきになるような、何かこちらが「赦してやる」というようなことでなくて、



「もし、兄弟との間がうまくないときには、相手をゆるさなければ、本当の祈りができない」

と、キリストが「主の祈り」の中でも言うておられる。相手に対して敵対関係がなくなって、敵あれども敵なしというところ。どんな敵があろうとも、もう敵のない世界に入る。向こうはこつちを敵だと思っているかもしれない。こつちは向こうをもはや敵と思っていない。もうひとつ奥に入っているから。もうひとつ底に入っているから。

天下無敵ということは、どん底に立っている人は天下無敵なんです。イエス・キリストと共にどん底に立つ人が本当の赦しの担いを持つている。イエス・キリストに在って私たちは人を担っている。だから、赦しの本当は、「いいよ」というのは、こちらが逆に相手を担っている態勢ですよ。そういうところにおいて初めて、私たちは、キリストが

「七度の七十倍」

と仰ったが、キリストはもちろん無限という意味で仰っていることが、楽に受けとられるわけです。

●「ベター・ザン・ザ・ベスト」

内村鑑三先生の本の百十六番目のところに、「ベター・ザン・ザ・ベスト」という文がある。私はこの表題を見て、びっくりしたんだ。グッド、ベター、ベストなのに、ベストの上にもまたベターがある。

「最善よりもより善きもの」という。

「最善よりも善きもの。ジョン・ウエスレーは言った。『最も善きことは、神われらと在し給つと』」

これは有名なウエスレーの言葉です。

と彼は言う。私は言う、最も善きことよりも更に善きことは、神我らの罪を赦し給つと。

はつきりと内村先生はこういうことを言うところに、もう何ともいえないあれがあります。がね。

誠にこの神はその愛子にあって、彼の十字架の死をもって我らの全ての罪をぬぐい去り給った。恩恵の極みとはこのことである。彼にありては彼以外にこのことなし。我らの罪の赦されん為に苦しみ給いしイエスにありては、罪ある者はないのである。しかして、我らは信仰によりてこの罪なき境涯にて生きまた動きまた在ることができるのである。誠に霊的生命とはこの境涯である。奥義である。されども、事実である。麗しき道理に適った事実である。これは誠に罪ひととり善きに過ぎたる音信である。福音である。喜ばしき音信である。もっとも善きものよりも更に善きものである。



(1923年2月)

1923年2月といえば、私がちょうど信仰に入った年だ。私はこの文章を見て、驚きまた喜んだ。

「ベター・ザン・ザ・ベスト」

という。それは、本当に内村先生は十字架がなければやりきれない人であった。我々一人ひとりがそうである。このやり切れないというやつが、「神共に」なんてそんな澄ましてなんかいられないんだ。

私は祈りで、「神さま、お父さま」と或るときは祈っていた。今だって、それは祈ったっていいだろうと思うけれども。キリストが

「汝ら祈るときに『父よ』と祈れ」

と言われたので、みんな

「父よ、父よ」

と祈っているね。それは悪くはないでしょう。けれども、それはヘタすると、キリストの主の祈りを十字架にかけてしまう。私にとってはキリストが一切だから、

「主さまー」

というときに、その向こうに突き抜けて、父なる神さまはいらつしやるんだ。いきなり「お父さま」と言ったって、それはいいんだけど。仕方がない、私は「主さま」と言う。キリストに向かっている。イエス・キリストでなければどうにもならんから。主さまというのは全く救い主です。救い主は、この我執という自己本位のやつをすつ飛ばされた。これはカントの言葉です。

「自分自身と戦つこと、それは最も困難な戦いである。自分自身に打ち勝つことは最も

美わしい勝利である。」

ということ是要するに、自分自身との戦いは我執との戦いです。自己自身には、手放して打ち勝てない。これはキリストの力、御霊の力で打ち勝つ。このキリストの徹底的な赦しは、

「もう何も心配いらんよ」

と。もし、今、あなた方の中で何かくすぶっている人があつたら、ダメだよ、そんなのは。キリストに完全に赦されて、何を心配しているか。

「何を考えているか。バカになれ。そうしたら、私はそこにバーツと聖霊を与える」

とキリストは仰る。

●十字架の門

十字架は、私はいつも書いておるとおり、

「門構えに十」

と書く。門はキリストという、十字架という門です。ここを通つて向こうへ行くと、向こ



うは聖霊の燦然たる世界です。この十字架の門の下にぶつ倒れば、これは赦しの徹底的な世界です。現実はどうだつていいですよ。

「私はまだ潔められていません」

なんて、いつ潔まるつもりだ。「潔め」なんていうことをやってたつて、それはダメですよ。私はそんな澄ましているやつには、もう黙ってしまおう。人間は現実において、この地上の現実で潔まったなんて、誰が言えるかというんだ。偽善者よと言いたくなる。

イエス・キリストの本当の聖をただけがいい。そうすればこの泥の中に本当の金剛石が光を放つ。それでいいんです。それが霊的な変化を起こしていく。化学変化よりもつと凄く変化を起こして、やがて、この三日月は三日月でありながら——この三日月そのものに完全性がある——必ず満月になる。三日月は量的に三日月ではない。完全なる三日月というんだ。未完成交響楽というのがあるけれども、あれは未完成でありながら、完成の質を持っている。

芥種一粒の如きこの御霊は、私たちの中でマイナス99を、ただ1つのプラスがやつつていくんです。これは原始核ですから。この原始核をくださる。十字架を通つたものは、

「主よまー」

と言え、神・キリストが、この原始核的聖霊の火が入つてくださる。ただ

「はいー」

と言うだけ。その他に何も遠慮はいらない。

もう赦しの先に恵みが来ているんです。キリストはただ赦して止まっていけない。イエス・キリストは赦して止まっていけない。イエス・キリストは赦して止まっていけない。イエス・キリストは恵みを与える。赦しの積極面は恵みであります。即ち、「赦し」は十字架であるが、「恵み」は聖霊である。マルチン・ルターもあの『ロマ書序文』で書いている。「グナーデ」(恩恵)はこの聖霊のキリストの恵みの世界です。カリスマ的なものはただいろいろな、聖霊から来るところの「賜物」にすぎない。この恵みはイエス・キリスト自身です。御霊のキリスト自身が恵みの実体である。これが私たちの中に、皆さんの中にみな——月影は草の葉末の滴に全的に宿る。

「田毎の月」

という文をいつか書いたね、田毎の月なんです——一人ひとり全的に宿る。五十人いれば、五十分の一のキリストが入ってくるのではない。百分の百のキリストが入つてくださる。これが宗教の世界の神秘、奥義です。大胆にこれを受けとらなければ、これはもうしようがない。そして進んでくださいよ。どこであろうと、教会の無教会の幕屋のと、どうだつていいんだ、そんなことは。私たちは主イエス・キリストを中に入れて、

「御霊のキリストわがうちにあり、我を視よ」
というわけです。



●赦しと恵み

いいですか。あなた方は本当の天国人です。天国人が本当に地上を歩けるんだ。単なるロマンチックにただ終末の世界をこっちから見ているのではない。もう終末の世界は終末的現在として我々の中に来ている。だから、

「御国を来たらせたまえ」

と祈れる。必ず来るんです、御国は来ているんだから。我々のうちに御国の中核が来ている。皆さん一人びとりがこの全地球の、全世界の中心なんだよ。そういう不思議な世界に私たちは入れられている。

私たちの魂はそういったもの凄いものにぶつかるとまではどうにもならないようにできている。そのように造られているのに、なぜ、ケチ臭いものでみんな満足しているか。

「経済だ、政治だ、思想だ」

と、何をぬかすかと言うんだ。この主イエス・キリストのところに来て、降参するまではこの世界に入れない。降参したら、キリストは

「よしっ」

と言つて赦してください。そうしたらもう、赦しを通して恵みが燦々として来るところの恵みの世界です。赦し(十字架)と恵み(聖霊)は離すことができない。赦しで満足するのではない。

だから、

「もう、いいよ」

と言つたら、今度は人を本当に恵みの世界に入れてしまう。

「何だ、そんな負債なんか勘定していることはあるか」

というんだ。それが本当に無即無限の世界です。天界へ行くときに、何を携えて行けるのか。主イエス・キリストの聖霊の翼をもつて天界へ行かないで、何を持って天界へ行けるのか。どうせ、この地上は百年だよ。私はいくら長生きしたって、百年を突破するかしないかわらないんじゃないよ。とにかく、そんなものは序曲にすぎない。私たちの本曲は、天界です。

「わが国籍は天にあり。汝らは既にキリストの懐にある」

とパウロがコロサイ書の中で言っている。熾さかんなるかなパウロ。彼はあんなにぶつ潰されて、

「もう、私はキリストの他は何もいらん。生くるも死ぬるも、そんな相対的な

ものは問題でない。相対的な生も死も問題でない。わがうちなる絶対なるこ

の永遠の生命を如何せん」

と言う。

自分なんてものを何考えているか。いいですか、イエス・キリストの永遠の生命を、このもの凄いものを受けとらないで、この地を去ってはいかんぞ。皆さんは——存在即使命——誰が認めなくても、天国を築く大事な一人びとりであり、天国の柱である。あなた方



は坐っているけれども、もう本当は宇宙を飛び歩くような姿になっている。あなた方の後ろに天使がついているんだ。何も考えることはない。いや何といても、キリストは素晴らしい。もう、みんな光つてしまうよ。あなた方は、写真を撮ったら映らない。映ってはダメだ。それくらいなもんですよ。

●恵みの中に

だから、「赦し」なんて言っても、私は恵みの中に飛び込んでしまった。私は本当は、表題を作って話するのが嫌いなんだ、いつも脱線してしまうから。申し訳ないけれども、そういうわけで、何とも言えない。私たちの福音はもうグーツと貫いて、再臨のキリストまでずつと行ってしまうんですよ、いつも。十字架を語れば、後ろに復活のキリストがあるし、御霊が降ってくるし、再臨のキリストが、天界が見えてくるし。もう、これはグーツと貫いている。過去も現在も未来もずつと、現実にイエス・キリストを見る。

二千光年の向こう側から、もの凄い望遠鏡で見たら、キリストがナザレでやってらつしやるところが見えるわけだ。ま、理論的にはそういうことになるでしょう。

しかし、そんなことよりも、現に今生きていらつしやるところのキリストは、二千年前の地上で現れていたキリストよりもつと凄い意味で私たちの中に迫ってくださいている。だから、福音書の現実には直々に現在——いつも現在です、二千年前の記事を読んでいるのではない——いつも現在として、私たちはキリストにぶつかると。

もう聖書は、本でないですよ、書かれた文字でありながら、実はこれは躍動している。聖書も、伝え難くして呻き叫んでいる。ありがたいです。

どうぞ、そういう世界に私たちは——この三日間は単なる三日ではない、「三」は非常に素晴らしい天的な文字だが——この三日は即ち永遠的な三日としてこの秋に向かって突撃していく。いいですか。簡単ですよ。全存在をもつて

「主さまー」

と呼んでごらん。呼べば直ちに主と一つになる。

「南無と言えは阿弥陀来にけり一つ身を我と言わん仏と言わん」

という素晴らしい歌があるじゃないか。その通りです。

「我と言わんキリストと言わん」

ということですよ。使徒行伝のこのペテロ、パウロ、ヨハネ。旧約の預言者たち、新約の使徒たち。私たちが慕わしいのは、彼らを友だちとする。彼らが本当の友だちですよ。そして進んでください。

